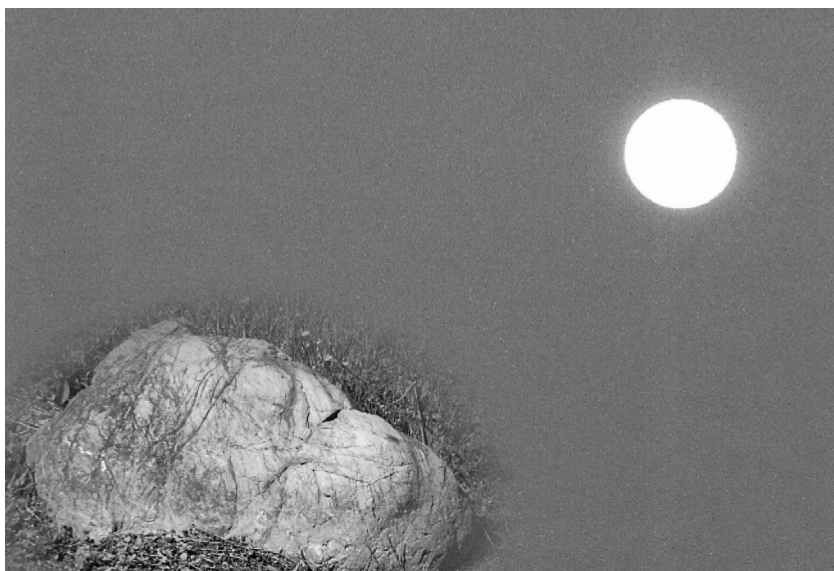


## 歌の周辺

美しいものを見て美しい歌を作る——それは普通のことであろう。或る時、何でもない石ころを材料にして、美しい歌を作ってみたくなった。幻想というものを利用すればいい。石の中に架空の花があつて、そこに月の光が差している、という風景にしよう。たぶんそんなことを考えて作った一首であろう。

まだ若かつたから、在り来たりの写実で満足できない時があつた。この歌を読むと、自分の中を通り過ぎていった（若さ）に再会するような気分になる。なお、「石中」はセキチユウと読む。

（高野公彦）



(写真・木畑紀子)

高野公彦うた紀行・11

石中にとはに鎖<sup>さ</sup>さるる花ありと思ほゆるまで月しろく差す

——『汽水の光』

【鑑賞】月光が石に差している。河原のような場所です。ひとつの石にとりわけつよく光が集まって見えている光景を想像する。思えば月も石である。空の石と地の石とをひとすじつなぐ白い光。その光がひとときの幻を見せる。これまでもこのさきも、だれも見ることの、触れることの、摘むことの叶わない花。まなざす主体の存在を介さないうつくしい完結を見せる自然の透徹に立ち尽くす。

(小島なお)



## ふるさとコレクション——182

### 翡翠（新潟県糸魚川市）

「古事記」上巻、「万葉集」巻13に翡翠にまつわる古代の美しい歌が伝えられている。縄文時代から古墳時代、ことに翠色の翡翠は、その硬度、透明な美ゆえに生命の誕生・再生を意味する霊的呪力をもつ石として神道の祭祀、権力者のステータスシンボルとして国の内外で珍重された。が、仏教伝来を機にか忽然とその存在は消滅してしまった。翡翠の原産国は日本ではないと信じられた永い時間があった。

昭和13年「高志の女王沼名河比売は翡翠を身につけていた、とする翡翠はこの地方の産では？」と示唆を与えたのは当地の相馬御風であった。古典など知悉する御風の言である。間もなく姫川水系小滝川に原石が確認された。大戦後大規模な発掘、学術調査が相継ぎ、勾玉の未完成品などと共に玉造り跡が多く出土した。わが地域の原初の工芸品工房の証かもしれない。翡翠とその文化圏に関して未だ解明出来ない命題は謎として、学会のみならず人々に豊かな夢をみさせ続けてくれるであろう。2016年糸魚川産翡翠は国石に指定された。

（写真・解説 清水 禎）